

優秀賞

こころ

常陸大宮市立第二中学校 一年

とよだあきと
豊田彪斗

中学校に入学して二ヶ月。入学式におろしたばかりの靴は、すぐにキツくなりました。新しく買ってもらった靴は三十センチです。家族の誰よりも大きくなつた足のぼくに父が「これだけデカイ足ならもっと力強い四股が踏めるな！」

と声をかけました。そう、ぼくの習い事は相撲です。小学校六年生の九月、ぼくは相撲を始めました。もともと体が大きいぼくに、周りの人がすすめてくれたことがきっかけです。本当の事を言うとあまり気が進みませんでした。身近に相撲を習っている人なんて一人もいなかつたし、何より自分のまわし姿を見られるのが恥ずかしかつたのです。見学だけだと軽い気持ちで稽古を見に行きました。道場に着いて十分後。ぼくは、もうまわしを付けられていきました。

気後れする間もなく、ぼくの人生初の相撲の稽古が始まりました。まずは四股。見様見まねでやつてみるも、体がフラフラして、全く出来ません。次はすり足。裸足で砂の上を歩くと違和感がありました。痛いようなくすぐつたいような、変な感覚を覚えています。道場の先生達はすごく優しくて、体力が無くすぐに疲れたぼくを労わりながら、ぼくの体付きをほめてくれました。太つてていることを「恵まれた体」と言われ、恥ずかしいような嬉しいような不思議な気持ちでした。稽古の時間はあつという間に過ぎ、ぼくが抱いていた相撲のイメージはガラッと変わつていました。体同士がぶつかり合う音、土俵の砂が舞う様、テレビでしか見たことのなかつた相撲。全ての迫力に五感が刺激されました。これが、ぼくの相撲道の始まりです。

優しいと思っていた先生達との厳しい稽古が始まりました。体力を付けるための基礎トレーニングに始まり、柔軟体操。相手と組む取り組みの練習では、「頭から行け！」

と、もう何百回言われたか分かりません。頭で当たると、痛いし、怖かったぼくは、大会では負け続きでした。自分より小柄な選手にも敵いませんでした。めげたり、くじけそうになつたりすることもあつたけれど、稽古は休まず頑張りました。そんな時、白鵬杯に出ることになりました。日本各地、世界各国の相撲少年が出席する大きな大会です。不安と緊張で強ばるぼくに先生が声をかけました。

「勝たなくていい。負けたっていいから、今まで教わった事、自分の出来る事を全部やってこい。それでいい。」

その時、自分を信じることの大切さに気付きました。負けたらどうしよう、怖い。そんなことばかり考えていた自分をカッコ悪く感じました。一生懸命指導してくれる先生、送り迎えやサポートをしてくれる家族に、ぼくのやれる最大限を見せようと、気持ちを切り替えました。

その結果、ぼくは初めての白鵬杯で二勝をあげました。いつもケンカばかりの弟が、嬉しいと言つて、泣いていました。弟の涙は、自信がなかつたぼくに、頑張つて良かつ

た、と思わせてくれました。つらい稽古も、負け続けてきた日々も全部、ぼくの力になつていきました。ぼくは、まだまだ弱いし、厳しい戦いが続くと思います。しかし、ぼくの心は確実に強くなつていると感じます。自分の頑張りが誰かの心に届くことを知れたのは、相撲のおかげです。

相撲は、礼に始まり礼に終わります。相撲ができる環境があること、教えてくれる先生がいること、支えてくれる家族がいること、そして共に戦う仲間がいること。全てのことに感謝して、自分としつかり向き合うことも礼だと思います。そんな思いを胸に、ぼくは今日もまわしをしめて、土俵に立っています。きっと、これからもずっと。

